ウズベク語の動名詞 *-(i)sh* による連体修飾

日髙晋介
（東京外国語大学大学院）

0. はじめに

本稿では、ウズベク語[1]の動名詞 *-(i)sh*（否定形 *-maslik*）による連体修飾について、主に新聞記事テキストを用いながら、次の 3 点を明らかにする。

すなわち、①非定形動詞による連体修飾構造は形動詞（形容詞的動詞）のみならず動名詞によっても可能であること、②なおかつ動名詞による連体修飾構造は「さんまを焼く匂い」のような「外の関係」（寺村 1975）を示す傾向にあること、③この連体修飾における主要部名詞には必ず*-i/ -si* が付くという形態的特性があること、以上 3 点である。

そして、ウズベク語の動名詞による連体修飾では、主要部名詞に“Possessive Compound”（林 1995）という形態的手段を用いることで、動名詞節と主要部名詞の結びつきを形成していると結論付ける。

なお、本文中のグロス・例文番号・日本語訳・下線・囲み線はことわりのないかぎり筆者によるものである。

0.1. ウズベク語動詞形態法

本節では、ウズベク語の動詞形態法（表 1）を示す。括弧内の要素は任意要素である。

表 1: ウズベク語の動詞形態法

<table>
<tr><td colspan="3">動詞語幹</td><td colspan="2" rowspan="2">屈折接辞</td></tr>
<tr><td colspan="2">（派生接辞）</td></tr>
<tr><td rowspan="4">語根</td><td rowspan="4">（態）</td><td rowspan="4">（否定）</td><td>定動詞接辞</td><td rowspan="3">人称接辞</td></tr>
<tr><td>形動詞接辞</td></tr>
<tr><td>動名詞接辞</td></tr>
<tr><td>副動詞接辞</td><td></td></tr>
</table>

1. 先行研究

1.1. ウズベク語の参照文法書における記述 — Kononov(1960), Bodlogrigeti(2003)

本節では、形動詞・動名詞について説明したのちに、形動詞節・動名詞節における主語標示について述べる。

1.1.1. 形動詞・動名詞

形動詞は、Kononov(1960: 238-9)では причастие、Bodrogligeti(2003: 615-40)では The participle (Verbal Adjective)と呼ばれ、名詞的用法・連体的用法・述語的用法があると考えられている。本稿で扱うテキスト（2 節を参照されたい）で現れた形動詞の形式は次の通りである[2]。*-gan/ -kan/ -qan* [PAST], *-(a)yotgan* [PRS],

---

[1] チュルク語の 1 種。主にウズベキスタン共和国内で話される。話者数は約 1660 万人。東方またはチャガタイと呼ばれる言語グループに属する。子音音素は 36 個、母音音素は 6 個。SOV 語順である。1940 年にキリル文字正書法が制定された。母音調和は行われない（庄垣内 1988: 829 要約）。1993 年に新ラテン文字正書法が制定された（Boeschoten 1998: 357-8）。本稿では、新ラテン文字正書法を用いて表記する。

[2] 先行研究（Kononov 1960: 238-9, Bodrogligeti 2003: 615-40）では、次の形式も挙げられている: *-(a)r*、*-ajak/ -yajak*、*-uvchi*、*-mas*、*-guvchi*、*-ig‘li*、*-ig’lik*

{-a/ -y}digan [NPST[3]], *-uvchi* [AGENT[4]]（Bodrogligteti 2003: 616-39）動名詞は語彙的派生を行うほか、節を形成することも可能である。本稿における調査では*-(i)sh, -maslik* の 2 種類の形式が現れた[5]。

1.1.2. 形動詞節・動名詞節における主語標示

1.1.2.1. 連体的用法の場合

被修飾名詞が形動詞節内の主語である場合は人称標示されない。

(1) *hat-ni* *yoz-gan* *kishi*
letter-ACC write-PTCP.PAST person
「手紙を書いた人」

被修飾名詞が形動詞節の主語以外の語であり、かつ形動詞節内の主語が属格（*-ning*）で現れる場合は、被修飾名詞に所有人称接辞が付く。主格で現れる場合は、所有人称接辞がつかない。

(2) a. *(men-ning)* *yoz-gan* *xat-im*
1.SG-GEN write-PTCP.PAST letter-1.SG.POSS
b. *men* *yoz-gan* *xat*
1.SG write-PTCP.PAST letter
「私が書いた手紙」

1.1.2.2. 連体的用法以外の場合

節内の主語は、動名詞・形動詞に付く所有人称接尾辞と数・人称で一致し、主格か属格で表れる。節内の人称代名詞主語が省略される場合もある。

(3) *<u>Yigitcha(-ning)</u>* *nima* *de-moqchi* *<u>bo'l-gan-i</u>* *anglash-il-di-ø.* (Boeschoten 1998: 375)
boy-GEN what say-ITT become-PTCP.PAST-3.SG.POSS to.be.understood-PASS-PAST-3.SG
「男の子が何を言いたかったのかが理解された。」

(4) *Mayib* *qil-ib* *<u>qoy-ish-im</u>* *mumkin.* (Bodrogligteti 2003: 855)
hurt do-CVB put-VN-1.SG.POSS possible
「私は（あなたを）痛めつけてしまうかもしれない」

1.2. 言語類型論における記述 — Comrie(1998)

Comrie(1998)は、多くの言語の連体修飾について触れている。その中で、チュルク諸語（トルコ語とカラチャイ・バルカル語）の連体修飾パターンについて次のような例を挙げている（Comrie 1998: 57-58）。

---

[3] Bodrogligteti(2003: 620-22)では、*{-a/ -y}digan* を“The present-Future Particles”としている。
[4] Bodrogligeti(2003: 638)では、*-uvchi* を“agent-participle”としている。
[5] Bodrogligeti(2003: 568-78)では、以下の形式も挙げられている。*-moq, -ma, -gi, -(u)v, -(i)m/ -(u)m, -(a)rlik, -(u)vlik, -ganlik/ -kanlik/ -qanlik, -ajaklik, -moqlik, -(u)vlik, -(i)shlik*

なお、以下の例のグロスは本稿に従っている。

トルコ語における連体修飾構造では主要部名詞を節に戻した場合、それが主語であるか非主語であるかによって述語の形態が異なる（主語の場合 *-(y)An*、非主語の場合 *-DIK*）。

(5) *kitab-ı* *al-an* *öğrenci*
book-ACC buy-PTCP student
'the student who bought the book'

(6) *öğrenci-nin* *al-dığ-ı* *kitap*
student-GEN buy-PTCP-3.SG.POSS book
'the book which the student bought'

(7) *cumhurbaşkanı-nın* *gel-diğ-i* *haber-i*
president-GEN come-VN-3.SG.POSS news-3.SG.POSS
'the news that the president has come'

一方で、カラチャイ・バルカル語については、トルコ語と異なり、どのような連体修飾構造においても、一つの動詞形態（完了形動詞-*GAn*）で表すことができる。

(8) *kitab-ï* *al-ɣan* *oquwču*
book-ACC buy-PTCP student
'the student who bought the book'

(9) *oquwču* *al-ɣan* *kitap*
student buy-PTCP book
'the book that the student bought'

(10) *prezident* *kel-gän* *hapar*
president come-PTCP news
'the news that the president has come'

1.3. 先行研究の問題点

ウズベク語は、Comrie(1998: 57-58)で示されたチュルク語に属する二つの言語（トルコ語とカラチャイ・バルカル語）とは異なる連体修飾構造を有すると考えられる。ウズベク語連体修飾について従来の記述（1.1 節）を参照すると、ウズベク語の連体修飾構造は、カラチャイ・バルカル語に類似していると考えられる。

表 2: トルコ語、カラチャイ・バルカル語、ウズベク語の連体修飾における述部接尾辞

	トルコ語	カラチャイ・バルカル語	ウズベク語[6]
主語	*-(y)An* (5)	*-GAn* (8) (9) (10)	*-Gan* (1) (2)
非主語	*-DIK* (6) (7)		

しかし、実際のテキストでは、(11)のように動名詞を用いた連体修飾構造が見られる。さらに主要部名詞に 3 人称単数を表す所有人称接尾辞 *-i/ -si* が付いているという点にも注目されたい。

[6] ここでは形態素の代表形を挙げる。動詞語幹末の音素によって、*-gan/ -kan/ -qan* に交替する。

(11)*molmulk-i* *narx-i-ni* *belgila-sh* *jarayon-i*
property-3.SG.POSS price-3.SG.POSS-ACC decide.on-VN process-3.SG.POSS
「その所有物の価格を定める（という）過程」

2. 調査

まず、5 本のウズベク語新聞記事[7]テキストから非定形動詞による連体修飾構造を抽出した。その分布は形動詞 63 例、動名詞 10 例（*-(i)sh*: 7 例、*-maslik*: 3 例）であった。

さらに動名詞による連体修飾の用例を増やすために、6 月第一週の新聞記事[8]から計 39 例（*-(i)sh*: 38 例、*-maslik*: 1 例）を抽出した。

3. 考察

3.1. 動名詞による連体修飾における修飾部と被修飾部の関係

まず、5 本のウズベク語新聞記事テキストから抽出した用例を「内の関係」または「外の関係」（寺村 1975）を持つかどうかという観点で分類する。

表 3: テキスト内における連体修飾の分布

		内の関係	外の関係	計
形動詞		59	4	***63***
動名詞	*-(i)sh*		***7***	***10***
	-maslik		***3***	
計		59	14	73

6 月第一週の新聞記事から得られた、動名詞による連体修飾 39 例もすべて外の関係を表している。ただし、母語話者の内省では次のような例文[9]も可能であるという。

(12)*Kola* *ishla-b* *chiqar-ish* *firma-si*
Cola work-CVB get.out-VN company-3.SG.POSS
「コーラを作る会社」

3.2. 主要部名詞の形態的特性について

ウズベク語における動名詞による連体修飾では、主要部名詞に形態的特性が見られる。その特性とは、主要部名詞に*-i/ -si* が必ず付くことである。

---

[7] Ozodlik Radiosi のウズベキスタン国内のニュース(http://www.ozodlik.org/archive/uz-uzbekistan/latest/421/421.html)の内 2013 年 2~5 月の記事から任意に 5 本の記事を選んだ。単語数は約 2600 語、文字数は 19,200 文字である。

[8] 脚注 7 で示したサイトから記事を収集した。記事数は 39 本、単語数は約 15,700 語、文字数は約 114,600 文字である。調査・考察の節で例示する文は、ことわりのない限り脚注 7 と本脚注で示した記事から得たものである。

[9] 同じ母語話者から、形動詞を用いた文も得られた。しかし、これら二つの文の差異については明らかになっていない。
(12′) *Kola* *ishla-b* *chiqar-adigan* *firma*
Cola work-CVB get.out-PTCP.NPST company
「コーラを作る会社」

(13)*tovlamachilik* *uchun* *besh* *yil-dan* *o'n* *yil-gacha* *ozodlik-dan* *mahrum* *qil-ish*
trick because.of five year-ABL ten year-until freedam-ABL lose do-VN

jazo-si *ko'z-da* *tut-il-gan-ø.*
punishment-3.SG.POSS eye-LOC catch-PASS-3.SG
「詐欺のために 5 年から 10 年まで自由を奪う罰が念頭に置かれた。」

これは、(14)のような複合名詞（いわゆる"Possessive Compound"）を形成する接辞と考えられる。なぜならば、動名詞節内に主語が表れていないためである。

(14)*[[Tokio]* *universitet-**i**]*
Tokyo university-3.SG.POSS
「東京大学」

"Possessive Compound"について、林(1995)は伝統的な立場での「複合」とは異なっていると注釈を加えた（p. 466）上で、"Possessive Compound"の構成要素に様々な成分を含み得ること、さらに限定的にではあるがその構成要素が統語的自立性を持つことから、通常の複合語に比べやや「句」に近い特徴を持つものであると述べている。

次の(15)では、連体節と主要部名詞に*-i* が現れている。一見すると主語の数・人称が二重標示されているように見える。本稿における調査では、このような例は 49 例中 3 例見られた。

(15)*lekin* *[[ism-i* *efir-da* *ayt-il-maslig-**i_1**]* *shart-**i_2**]*
but name-3.SG.POSS broadcast-LOC say-PASS-VN.NEG-3.SG.POSS condition-3.SG.POSS

bilan *gapir-di-ø*
with talk-PAST-3.SG
「しかし、彼は自分の名前が放送で言及されないという条件で話した。」

母語話者二名に、***-i_1*** あり・***-i_2*** なしの例（*...ayt-il-maslig-**i_1** shart*）、***-i_1*** なし・***-i_2*** ありの例（*...ayt-il-maslik shart-**i_2***）、計 2 例を提示したところ、***-i_2*** が欠けた前者の例は容認されなかった。つまり、動名詞節内の主語を表す 3 人称所有接辞 ***-i_1*** は必須ではなく、Possessive Compound を形成する接辞 ***-i_2*** は必須であることが明らかとなった。したがって、***-i_1*** が動名詞節内の主語と一致し、***-i_2*** が"Possessive Compound"を形成する接尾辞であると考えられる。

4. 結論

寺村(1977: 3-6)は、二つの連文（S_1 と S_2）を提示し、日本語における内の関係の成立の契機を次の（ⅰ）~（ⅲ）にまとめている。

（ⅰ）S_1 と S_2 が同一の名詞を含むこと

（ⅱ）修飾部になるべき S_2 の中のその名詞が、一定の（各助動詞を失ってもその述語に対する意味関係が推測されるような）格に立っていること
（ⅲ）修飾部の陳述度が一定限度内であること

それに対して、外の関係には、（ⅰ）（ⅱ）は存在せず、このような連体修飾関係を成り立たせるのは、底の名詞（主要部名詞）および修飾部の意味的特性以外にない、と述べている。

ウズベク語における外の関係においても、寺村(1977: 3-6)で挙げられた（ⅰ）（ⅱ）は存在しない。したがって、“Possessive Compound”という形態的手段を用いることで、連体節と主要部名詞の結びつきを形成していると考えられる。

5. おわりに

本稿では、動名詞による連体修飾構造は「外の関係」を表し、主要部名詞には必ず*-i/ -si* が付くという形態的特性があることを示した。

その形態的特性を持つ理由として、主要部名詞に“Possessive Compound”という形態的手段を用いることで動名詞節と主要部名詞の結びつきを形成していることを結論で述べた。

略号一覧

- 接辞境界／1, 2, 3　各 1, 2, 3 人称／ABL (ablative) 奪格／ACC (accusative) 対格／AGENT (agent) 動作主／CVB (converb) 副動詞／GEN (genitive) 属格／ITT (intentional) 意図／LOC (locative) 位格／NEG (negative) 否定／NPST (non-past) 非過去／PASS (passive) 受身／PAST (past) 過去／POSS (possessive) 所有／PRS (present) 現在／PTCP (participle) 形動詞／SG (singular) 単数／VN (verbal noun) 動名詞

参照文献

Bodrogligeti, Andràs J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek* München: LINCOM EUROPA.／Boeschoten, Hendrik (1998) Uzbek. Johanson, Lars and Éva Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*. 357-78. London, New York: Routledge.／Comrie, Bernerd (1998) Attributive clauses in Asian languages: Towards an areal typology. Winfried Boeder, Christoph Schroeder, Karl Heinz Wagner, and Wolfgang Wildgen, eds. *Sprache in Raum und Zeit, In memoriam Johannes Bechert, Band 2: Beiträge zur empirischen Sprachwissenschaft*, 51-60. Tübingen: Gunter Narr.／林徹 (1995)「現代トルコ語の Possessive Compound について」『東京大学言語学論集』14: 463-479.／Kononov, A. N. (1960) *Grammatika sovremennogo uzbekskogo jazyka*. Moskwa, Leningrad: Izdatel’stvo Akademii Nauk SSSR.／庄垣内正弘 (1988)「ウズベク語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典（第 1 巻世界言語編　上）』829-833. 東京: 三省堂／寺村秀夫 (1975)「連体修飾のシンタクスと意味―その 1―」『日本語・日本文化』4: 71-119.／寺村秀夫 (1977)「連体修飾のシンタクスと意味―その 3―」『日本語・日本文化』6: 1-36.